

〈書 評〉

Textbook in Psychiatric

Epidemiology

Ming T. Tsuang,

Mauricio Tohen,

Gwendolyn E. Zahner 監修

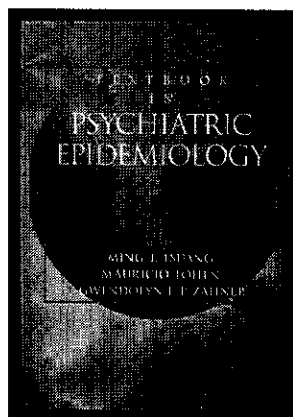
25cm 483頁

John Wiley & Sons, Inc. 発行 1995

日本や欧米などの先進国の疫学の歴史を辿れば、その疾病構造の変化により、かつての感染症を中心とした疫学から、最近では癌や循環器疾患等の非感染症を中心とした疫学へと疫学のメインストリームが推移してきている。いわゆる成人病といわれる病気の元を作り出す要因として、人々の生活習慣やライフスタイルの変化が挙げられる。科学技術が飛躍的に進歩し、社会経済が加速度的に発展するにつれて、現代人にふりかかるストレスも大きくなる。このストレスにうまく対処できないと、心身を痛めつけてしまう場合がある。

例えば、高血圧症のように身体に障害を受けた場合、血圧計という血圧を客観的に測定することのできる道具があるが、心に障害を受けた場合、血圧計に相当するような心の状態を測る道具は今のところない。信頼性・妥当性のある道具が無いことが、精神疫学の発展の障害となってきた。が近年、高性能かつ操作の簡便なコンピューターの到来と Psychometric Theory の発達により、心を測る道具の開発が可能になってきた。将来は、疾患特有の脳内物質や脳・遺伝子のマッピングも可能になるかもしれないが、精神疫学の現段階においては、現象学に基づいたより信頼性・妥当性のある尺度に頼らざるをえない。

日本では、精神疫学の歴史が浅いためか、この分野でのよい教科書が見当たらない。ここに紹介する「Textbook in Psychiatric Epidemiology」は、Harvard



大学の精神疫学の教師陣が中心となって、Harvard Training in Psychiatric Epidemiology and Biostatistics に参加する学生やレジデントのために編纂された本である。

この本は、4つの章からなっている。第1章は精神疾患のフィールド研究における妥当性の問題を歴史的にレビューしてある。第2章は精神疫学の研究デザインと方法について書かれており、主要な精神疫学の例も挙げられている。第3章はDSM-IV や種々の尺度を取り上げ、信頼性・妥当性の評価について書かれている。第4章は精神分裂病、うつ病、アルコール・薬物依存症等主な精神疾患別に、それぞれの疫学について述べられている。

精神疫学の基本的な知識が得られるよう系統立てて構成されており、精神疫学という何だか得体の知れないものの全体像をこの本を読むことによって初心者でもわかるように解説された入門書である。この本を読んで精神疫学に興味を持たれた方は、Psychometric Theory 等の専門書を読むことで精神疫学に対する理解をさらに深めることができよう。

土井由利子 (疫学部)